

卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和3年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	東京工業大学	整 理 番 号	2001
プログラム名称	マルチスコープ・エネルギー卓越人材		
プログラム責任者	中井 検裕	プログラムコーディネーター	伊原 学
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初計画に沿って順調に進捗している。 ・一方で、申請時調書では、並行して進められている他プログラムと違い、学部で募集(応募)、修士課程1年から履修という形をとっておらず、修士課程1年募集、修士課程2年からの4年間の履修プログラムとなっている。他プログラムとの相違の背景等についての説明を求めたものの、十分な回答は得られず、先行するプログラムに倣うまたは連携するという取組は行われていないように思えた。 ・また、リベラルアーツ教育においては単なる一般教養的な内容の履修にとどまらず、東京工業大学独自の社会貢献(影響)・ビジネス(市場)指向に根差した実務的な取組が覗えた。さらに強化を図るために、本プログラムに特別にカスタマイズされた一橋大学のカリキュラムが加わることで、より一層の効果を上げている。 ・学生との意見交換においても、留学生・学部進級生ともに非常に優秀であり、本プログラムの趣旨を十分に理解した上で、自らのキャリアパス・将来ビジョンを実現すべく本プログラムに応募していることが覗えた。特にキャリアパスに関しては、アカデミアでの研究、企業での研究・事業、あるいは社会貢献への従事等に向けて時間をかけて熟考・検討する姿勢が見られ、学生が偏ることなく多様なキャリアパスを描いていることは高度な「知のプロフェッショナル」の育成という観点から非常に好ましいことである。 <p>【大学院教育全体の改革への取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラムの開始から6か月経過した時点において、マネジメント層は本プログラムの円滑な執行に集中しており、大学院全体への改革については未だ明確には示されていない。本プログラムが軌道に乗るまではまず本プログラムに集中していただくことも重要であるが、大学院全体の改革の方向も示していくべきと考える。 ・一方で、先行する学内の他プログラムに学ぶ(倣う)ことも多々あると思われ、プログラム間のマネジメント連携については強化が必要であると思われる。進捗状況概要にも示した通り、履修期間の違いなど(先行するプログラムは5年、本プログラムは4年)について明確な説明はなかったが、修士1年次修了時の選抜、2年時からの卓越プログラム開始に関しては、多様多数の科目群で構成されるカリキュラム(卓越基盤: Expertise)と修士2年時の研究並びにその成果としての修士論文の作成時期が重なることになる。この結果、学生への過度な負荷、または各科目、研究に集中できなくなるというところが懸念される。特に履修期間の違いが他プログラムとの整合や大学院全体の改革に向けてどういった影響・効果があるのかも検討されることを期待する。今後、大学院全体の改革に卓越大学院プログラムに採択された3プログラムがどのように連携し、推進していくのかという具体的な計画を立案、示していただくことが重要と思われる。 <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生とマネジメントの間での有機的なコミュニケーションの実現・強化とプログラ 			

ムへのタイムリーなフィードバックを心掛けていただきたい。具体的には、学生から以下の5点の問題指摘・要望があった。

①履修生が希望する（あるいは必修の）カリキュラムを柔軟に履修する仕組みの構築
履修スケジュールについては、特に博士後期課程から本プログラムに入ってきた学生は、修士課程時に受講すべき講義等に追いつかなければならず、履修負担が大きくなっている。また、異分野の講義を取りたくても、時間割上コンフリクトしていて受講できない場合もあり、本プログラム全体としての配慮と調整が望まれる。

②マネジメント→履修生へのタイムリー・迅速な情報発信

プログラムのイベント等の情報については、直前に周知が行われることなどもあり、学生にとって見通しが立てにくい、事前の参加準備等ができないなどの不都合が生じること多いという報告があったので、今後は中長期的なスケジュールと共に早めに学生へ周知するように努力していただきたい。

③履修生に寄り添うメンター制度の実現・強化

プログラムの履修や困難が生じた場合に、誰に相談したらいいのか分からなくて困るという状況があるようなので、どのような内容はどこに（誰に）相談すればいいのかについて、担当・相談窓口等を設け、プログラム生への周知を徹底することが望まれる。

④学生間コミュニケーションを誘起・支援する仕組みの構築

プログラム学生間の交流が、各イベント内のみ限定されがちであるので、Slack 等ツールや SNS を利用した日常的な学生同士の交流や情報交換の促進をプログラムとして支援してもらいたい、という要望が学生からあった。教員間では、既に Slack を利用されているということなので、是非プログラム学生のコミュニティー支援のためにも活用していただきたい。

⑤専攻外カリキュラム受講に向けた支援の工夫

履修生は、自らが専門（専攻）としない領域において履修内容がかなり難しくついていけない、という問題を抱えている。基礎的な教育をオンデマンドで行うなど、専攻外分野の履修については支援の工夫が必要であると思われる。